

JIT STREAM



じっとストリーム

Miyabi

はじめに...



「バプー航空が...、

お送りするラジオ番組...、

JIT STREAM じっとストリーム

皆様のご案内役は、ジョー・ミヤビです...。」

(注)城達也風にカッコ良く詠んで下さい。

演奏：じっとストリームオーケストラ

ナレーション：ジョー・ミヤビ

製作：ラジオミヤビー

協力：バプー航空

お約束の...



曲目：「論理男(ミスターロンリー)」

♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～

遠い水平線が消えて...

ふかぶかとした寝具に身体を休める頃...

繁華街の路上を...

賑やかに流れ去る酔っぱらい達は...

たゆみない人生の営みを告げています...

幼い時間にいただいたはてしない愛情の海を...

ゆたかに流れゆく歌声に耳を澄ませば...

きらめく竹取り物語も聞こえてくる...

夜のおとぎ話の何と饒舌なことでしょうか...

光と影の境に消えていった...

はるかな爺さん婆さんも...

臉に浮かんでまいります...

♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～

ここからは超真面目です...



『夜は心のラジエター』



『夜は心のラジエター』

月明かりに誘われて
ウィンドウを
ほんの少し開いてみた

僅か10cmにも満たない隙間から
ヒンヤリとした透明の冬が
車内に迷い込む深夜の県道

昼間の喧騒が
嘘の様に静まりかえった街は
濃紺色のベールで
包み込んだ世界と化す

それは
狂気じみた人間社会で擦り減った
神経を癒す色だ

もしこの世に夜が無かったら
酷く息苦しかったに違いない

さながら

冷静さを取り戻すための

心のラジエターかも知れない

『高架橋を越えて』



『高架橋を越えて』

国道の交差点に
青森方面と書いてある

眩しいヘッドライトの明かりを浴びて
映し出されるのは
深夜の高架橋

それは
黒い巨人の如くそびえ立ち
あたかも壁のように
行く手を阻んで見えるのだ

あそこを渡ると
故郷に近づくかも知れない

まるで
地響きのようにこだまする
トラック達を目で追いながら

荷台に乗って

北へ向かう自分を想像したのは

いつの日だったか

『思いやりの駅前』



『思いやりの駅前』

1台

また1台と

乗用車が停車する

マフラーから立ち込める湯気が

今夜の気温を物語る

冬の石巻駅前

点滅する

幾つものウィンカーを眺めていると

つい

ツリーのイルミネーションを連想してしまう

X'masプレゼントを

そろそろ準備しておかねば

などと

頭の中を巡らせていた頃

ローカル電車が到着した

駅舎から出た乗客達は

寒そうに

肩をすくめながら歩いてくる

やがて

家族を見つけては

クルマに乗り込んで消えていった

1台

また1台と

乗用車は駅を後にした

気が付くと

クルマは私だけになっていた

『南蛮船と偉人』



『南蛮船と偉人』

江戸時代の船
サンファンバウテスタ号が
輝いている

それは
郷土のシンボル

黄金のイルミネーションで着飾られ
誇らしげに
12月の夜空を照らしている

まるで
使命に身を捧げ
ローマへ決死の航海を果たした
支倉常長の
存在を知らしめるかのようだ

彼は法王から
ドンフィリップフランシスコハシクラ

の洗礼名を受けたという

もし

幕府のキリスト教弾圧がなかったら

彼は

英雄として

後世に語り継がれた筈

だから

せめてクリスマスの季節だけは

精一杯輝いてほしい

私は

南蛮船が見える場所に

クルマを停めて

彼を偲んで祈った

『フェリーの2人』



『フェリーの2人』

北の大地が見たいと
誘ったのは君だった

天空の星々が
きらびやかに光る
夜の仙台港

夢に乗せたフェリーは
まるで
現実から解き放つかのように
2人を運んだ

凍えそうになる
冷気に包まれたデッキだが

しなやかに伸びた両腕で
夢が
逃げていかないように
君はしがみついた

柔らかく
透き通るような白い手の
その温もりは

僕の体に
いつまでも
いつまでも
残っていた

『夜に現れる獣』



『夜に現れる獣』

漆黒の闇を照らす
ビームが
4つ並んでいる

恐る恐る
正面を覗いて見ると
そこには

まるで
怒り狂った鬼の形相のように
行く手を睨みつけている
愛車

静寂をかき消す
雄叫びを上げ
うごめく獣

仏顔は仮の姿で
日が沈むと

真の本性をついに現す

色の死んだ街道を

この

獣の背に乗って

今夜も

宛ても無く突っ走る

その

魔力に引きつられる僕は

ある種の犠牲者なのだろうか

『夜道の松島』



『夜道の松島』

松島に来たなら
観光船に乗って
島巡りは必ずだよ

何て言っても
日本三景だ
眺めの良さは
自慢だよ

それと
カキも食べていきな
美味いよ

寒い冬に捕れる
海の幸は絶品だ
たまんないよ

そんな
店主の空耳が

聞こえるような
海産物屋の照明

赤や
黄色や
色とりどりの
看板も並んでいる

1年の
ほぼ毎日を
仕事で潰して
旅など縁のない私には

いささか眩し過ぎる
夜道の散歩は

一服の清涼剤と
いったところか

『勇気を与える工場』



『勇気を与える工場』

空が
赤く染まっている

製紙工場から
時折立ち上がる
高い炎が

天空をスクリーンにして
辺りを
真っ赤に照らし出すのだ

猛々と
立ち込める煙に巻かれて
霞んだ城は

高く
そびえ立つ高塔や

酷く

錆び付いたコンベアーが
至る所に張り巡らされている

さながら
夜の要塞といった威圧感で
見る者を圧倒する

私はいつしか
この化け物に
会いに来るようになった

その
力強い巨体を見上げると
元気や
勇気が湧いてくるのだ

今夜も彼は
誇らしげに
真っ赤な炎を上げている

『ボンネットの陰影』



『ボンネットの陰影』

月明かりの
夜に

ガレージを
ぼんやりと見ていた

そこに居る愛車は
昼間と違う
表情をしている

ボンネットの
起伏で作られた陰影が

まるで
彫刻のように
立体に見えるのだ

フェンダーから繋がる
優雅なラインや

通気孔と
センターバルジの凹凸を

光と
影が
強調して
目に訴えかけてくる

例えば
これが絵画だとしよう

昼に捉える姿は
緻密な
写実画で

夜は
抽象的な
印象画ではないだろうか

月明かりは
神様がくれる
絵の具なのかも知れない

『コックピットで感じる音』



『コックピットで感じる音』

時刻は
午前0時を
少し回った頃

夜遊び気分で足を伸ばした
見知らぬ街

私は
何気無くエンジンを切った

それまで聴っていた音や
振動が止まり

陽気な
ラテンの曲が消えると

次の瞬間

ぞっとするような静寂が
コックピットを迫ってきた

世間が
とっくに寝静まったことに
今頃気付いた私は

まるで
無人島に取り残されたような
心境を覚えた

窓を開けてみても

月明かりと
湿った風が
隙間から入るだけ

いたたまれなくなった
私のやるべき動作は

またキーを捻って
音楽を鳴らす以外になかった

『原点の学び舎』



『原点の学び舎』

その建物が
視界に入った瞬間

脳裏に
懐かしい風景が
蘇ってきた

教壇に立つ
担任教師

クラスの友達
机から見た教室

夜に
訪れた小学校は

辺りがどんなに真っ暗でも
洗々とした
光りを放っている

それは
まるで卒業生を
温かく出迎えているかのよう

誰だって
傷付いたり
凹んだりするものだ

解決する訳でもないのに
気が付くと
責めている自分がいた

そんな時は
原点に帰るといい

そこで

スタートした場所から
現在に至った道のりを
点検するのだ

この道は
いつか来た道と
歌ったこの学び舎で

『赤い橋のジンクス』



『赤い橋のジンクス』

ねえ？

あの橋を

2人で渡ってみない？

あどけない

19歳の

君の瞳が笑った

知ってた？

松島の赤い橋をアベックで渡ると

別れるジンクスがあるそうよ？

君に夢中だった私は

そんな言葉は気にも止めずに

手を引いた

少しだけ積もった

雪を踏みしめながら

男女は橋を渡った

着いた先は
風が強く吹き荒れる
小さな島だった

2人は
ぴったりと体を寄せ合いながら
向かい風に抵抗した

私たち
結ばれる約束したもの
大丈夫だよな？

あれから
何十回
冬を越しただろうか

厚い雲に月が隠れた
真っ暗な
今夜の松島

じっと見つめて
居る筈のない
あの日の2人を探してみた

暗闇の中いくら目を凝らしても
あの橋の色が
赤く見えることは無かった

『深夜のドライブ』



『深夜のドライブ』

点滅する信号機
ビル街をこだまする
エキゾースト

すれ違う者も
殆んどない
深夜のドライブ

減速もそこそこに
舵を切ると

クルマは
嫌がるように
交差点を折れた

傾く車体に
逆らう方へ
頭を押し付けながら

私は
アスファルトにきしむ
心地よいタイヤ音を
全開の窓から聞いていた

深夜のドライブは
刺激的だ

日中翻弄された
肉体と精神から
解放される作用が
あるのかも知れない

ただし
深追いはしないことだ

派手に飛ばしても
所詮未熟な
怖いもの知らず

速度の感覚が麻痺した者に
魔物が口を開けて
待っているだけだ

それを承知で
また
走るのは何故だろうか

『外が怒り狂ってる』



『外が怒り狂ってる』

運転席の
ドアを開けようとする

普通の
倍の腕力が必要だった

フロントガラスに
激しく打ち付ける
忌々しい雨も

気を重くする
理由の一つだ

私は
暗闇の中で
右に左に激しく首を振る
樹木を睨みながら

車外に出る

覚悟を決めた

やっと隙間が
出来たかと思うと

次の瞬間

今度は
途方もない圧力で
ドアが大きく口を開けた

ごうっ!という
音を伴いながら

雨と風の闘将は
クルマに
襲い掛かってきたのだ

成す術を失った私は
やむ追えず
車内に引き返した

あとは
勢いよく流れる黒雲を

ただ
じっと眺めることしか
出来なかった

『新幹線の寝ぐら』



『新幹線の寝ぐら』

初めて
訪れる者は
驚く

そこは
腰を抜かす程の
広大な規模の
施設を誇っている

言わば
新幹線の寝ぐら
と呼ぶのに
相応しい場所である

数秒の遅れも
管理されるほど
緻密な計画で運行する
鉄道

朝夕
神経を擦り減らしながら
走る彼らが

唯一安らぐ
寝ぐらが
ここなのだ

時折
帰って来ては
シャワーを浴びたり
休息しているに違いない

夜に
前を通過してみた

施設の窓からは
沢山の明かりが
横一列に並んでいる

それも
300mとも
400mともつかない
途方もなく長い
窓の光の連続だった

『ナトリウムの灯火(ともしび)』



『ナトリウムの灯火(ともしび)』

その色は
オレンジ

真っ暗な
夜の仙台港で
光っている

暗い筈の
地面も

見えない筈の
岸壁も

明るく照らしている

それは
視界を手助けする
単なる外灯にすぎない

だが

岸壁の間近に

クルマを横たえて

海を眺めながら

思いにふけっている人に

幾らかの

希望を与えてくれる光りだ

ナトリウムの灯火は

温かい色をしている

それが

救いになるのだ

『冷い風が吹く町』



『冷い風が吹く町』

石巻の冬は
冷たい

初めて
この町を訪れた日は

底冷えする寒さに
震えた

何故だろう

その理由は

四方を
海と川で取り囲まれている
地形にあるらしい

南三陸の
蒼い海と

北上川に挟まれているから

年中

強い風が吹いているのだ

石巻では

冬になると

ドンブク姿と

ほっかむり姿の人を見掛ける

今夜も

冷たい風が

吹き荒れている

私は

クルマのヒーターを

最大にしたまま

早足で帰宅した

『パッセンジャー・シート』



『パッセンジャー・シート』

深夜の運転中
クルマのラジオから
懐かしい曲が流れてきた

それは
あの頃よく2人で
聴いた歌だった

次第に
懐かしい日々が
蘇ってきた

このクルマが
納車されて
一番に乗せたら

君は
とても喜んでくれた

私がこのシートに座わる
第一号ねって

それから
しばらく助手席は
彼女の指定席となった

砂浜を歩いた後
疲れて寝てしまったよね

寝息を立てている
君のあどけない顔も
浮かんできた

あれから一体どれ程
時間が経過しただろうか

思い出の曲は
終了した

僕の
パッセンジャー・シートに
君はもういない

『戦闘機の影』



『戦闘機の影』

眩い

月の明かりが照らす

静寂の夜だった

ときおり行き交う

クルマの通過音だけが

聞こえてくる

そこに横たわっているのは

現役を退いた

戦闘機のオブジェ

今は基地にほど近い

この場所で

静かに余生を過ごしている

私は

月明かりを遮る

影の下で思った

かつて彼が
雲上で太陽を浴び
音の速さで駆け巡っていた頃は
どんなに
勇ましかったことだろう

大戦から
何十年と経った今なお
兵器という傘があって
保たれている平和

必要としなくなる日は
いつか来るのだろうか

老兵は
今夜も月明かりで
鈍く光っていた



『港の記憶』

この岸壁を
訪れると
思い出すことがある

小学生時代に
自転車で
やって来ては
遊んだ
懐かしい記憶

夜の
塩竈港を
眺めていても

私には
昼間の風景が
浮かんで見えてきた

誰が

一番速いかを
競ったこともあった

暗がりに
目を凝らして
あの日の自分の姿を
追い求めてみた

夢中で
ペダルを踏んだけど
いつも最下位だった私

今夜は
外灯とヘッドライトを頼りに
思い出のコースを
クルマで辿ってみよう

誤って
岸壁から落ちないように
気を付けながら

『電話ボックスの思い出』



『電話ボックスの思い出』

もう
逢いません

そう告げられた私は
言葉の意味が
直ぐには理解出来なかった

もう
駄目なんです

間もなく
受話器を握る感覚が無くなった

もう
掛けてこないで

自分の耳を
疑った

わがままを
許して

ピーッ!

やがて公衆電話は
残り時間が切れる合図を放った

もう
逢いません

私は
慌てて小銭を探したが
見つからない

もう
駄目なんです

彼女を引き留める言葉も
見つからない

もう
二度と掛けてこないで

ピーーッ!!

そして
男女の通話は
無情にも途切れた

上手くいっていた筈の
2人の関係も途切れた

あの日も
今晚のような季節外れの
蒸した夜だった

『フランソワーズの女騎士』



『フランソワーズの女騎士』

冷たい雨の国道を
見慣れない2頭が飛ばしている

それは
まるで逃げる
紺の鎧兜をまとった騎士と

追う
眩しく銀に光る鉄仮面の騎士

2人は
息も吐かせぬ速度で

びしょ濡れで台無しの五大堂や
観光客で賑わう瑞巖寺を横目に
東に走らせた

何故急ぐのか尋ねられたとしても
説明はつかない

騎士とはそういうものだ

奥松島に入っても
磯の香りを楽しむ間も惜しんで
走る喜びに浸りたいのだ

紺色の騎士が
尋常でない加速で引き離そうとしても
きつい角を急に折れても

銀色の騎士は
すかさず後を着いてくる

中世では妃をめとる際
敢えて危険な馬に跨がらせ
道なき道を追わせたのだとか

荒馬を乗りこなし
ついて来れた女こそ
戦火の世に適した姫に選ばれたのだ

フランソワーズの女騎士のように

松島基地が見えて来る頃
雨は上がり

五月の空が
2人に
少し微笑みかけた気がした

『光るアスファルト』



『光るアスファルト』

一日中降り続いた
雨が上がる頃

夕暮れの田舎町に
ネオンが点り始めた

お世辞にも
明るいとは言えない外灯の
金色の光が

雨上がりの
アスファルトに照り返して
きらきら光っている

私は一瞬
カエルにでもなった気分で

暗闇に浮かぶ
金色の池の水面に

眼を泳がせた

それは
単なる光の反射に過ぎない

僅かの間でも
見つめているひととき
心まで透明になるのだ

だが
次の瞬間

家路を急ぐクルマの列に
ぐしゃっと
踏み潰されてしまった

『死の駐輪場』



『死の駐輪場』

終電が近づき
タクシーの灯りさえ疎らな
静寂の石巻駅

その傍らに

彼らは
ひっそりと佇んでいる

屋根も無い
壁も無い

ましてや
気の利いた意匠など
全く無視された此処は

自転車達の寝床

ひよっとすると

主人は
二度と乗らないかも知れないのに

錆びて朽ち果てて
逝きながら

沈黙を守り
ただひたすら待っている

雨風が吹きっさらす
市の駐輪場

私には
死の駐輪場
に思えてならない

『商店街に吹く風』



『商店街に吹く風』

一列に並んだ
真っ赤なツツジが

一人
薄暗くなった商店街を
歩く私に
微笑んでいる

中瀬に船が着く度ね
乗客が次々と降りては
商店街にどっと繰り出して来たんだよ

季節は
とっくに替わったのに

少し強い向かい風が
半袖に冷たい

まるで

タイムスリップにでも遇って
昭和初期にいるような
閑散とした街並みは

何処の田舎でも起きている
逆風状態だ

何でも飛ぶように売れてさ
町は買い物袋下げた人で溢れてた
あの頃は活気有って良かったなあ

そんな
店主の声が
聞こえたような気がした

『燃える水の儀式』



『燃える水の儀式』

それを
汲むには

誰しものが
幾等かの厄介な
儀式を踏まねばならない

先ず
左右を間違えず
慎重に横付けする

次に
クルマ脇の
小さな蓋を開け

女性の音声に
指示されるがままに
入力する

最後に
現金を投入して

ようやく
燃える水を
分けてもらえるのだ

ノズルから滴り落ちる
音を聞きながら

これが
灼熱の地で採掘され
危険な海峡をくぐり抜け
遠路遙々辿り着いて来る事を想像し
敬意を払う

10円値上げした位で
目クジラを立てては失礼
有り難く頂戴しなければならない
と思うのだ

おっと
釣り銭を忘れた

『ビルのにちにガオー』



『ビルのにちにガオー』

学校で
イヤなことがあって

こんな街なんか
無くなればいいんだ
などと思った日があった

我を忘れた
少年は

鋼鉄の鎧をまとった
大型ロボットを操り

なりふり構わず踏み潰し
辺り一面なぎ倒した

そんな幻想を思い浮かべる
蒸した夏の夜

仕事に追われ
時間に追われ
気が付くと
もう一日の終わり

帰路の車内から見た街に

暗闇の中で
巨体がうごめいた気がした

ビルのまちにガオー
夜のハイウエーにガオー

『お袋の笑顔』



『お袋の笑顔』

今度の病院がまた遠いのよ!

夏陽が少し沈むごとに
暗くなっていく夕暮れ

車内の会話も暗くなった

身体が治ったらまたお稽古行きたいけど
もう無理かしら?

田舎のショッピングセンターは
買い物客で溢れている

よっこらしょ!

お袋は座席から降りると
足をやや引きずりながら前を行った

夕飯のおかずは何が食べたい?

母と2人で買い物は
何十年振りだろう

これも美味しそうだよ!

おじいさんにはこれがいいかしら?

病のことを忘れて
買い物に夢中になる彼女

今日は息子と買い物なのよ!

顔を合わせた知り合いに
嬉しそうに私を紹介する
お袋の笑顔を見て

私は
一緒に来て良かったと思った

そして
帰りの車内は明るい会話となった

『雨夜の熱帯魚』



『雨夜の熱帯魚』

沢山の
ネオンテトラが泳いでいる
グッピーもいる

前からお尻から
光を放ち
同方向に進んでいる

彼らは
規則正しく列を作り

一旦立ち止まったかと思えば
今度は勢い良く飛び出していく

ガラスの向こうは
濡れて歪んだ
真っ暗な闇

蒸して鬱陶しい

雨降りの夏の夜

だが

ぼんやり見れば

駅前繁華街のクルマ群が

放つ光は水に反射し

彩りに変わって

まるで

水槽の熱帯魚の如く

疲れた目を

楽しませてくれるではないか

沢山の

ネオンテトラが泳いでいる

グッピーもいる

前からお尻から

光を放ち

同方向に進んでいる

『スポーツカー乗りは年を取らない』



『スポーツカー乗りは年を取らない』

ロケット

旅客機

新幹線

自動車

人は速い乗り物が好きだ

何故か

移動が短縮出来るほど

時間が有効に使えるからである

もしも

光の速さで走る自動車があったら

どうなるだろう

何と

それに乗れば

年を取らなくなるらしい

ひよっとすると
浦島太郎が乗った亀は
それだったかも知れない

速く移動すればするほど
外部に比べて
車内の時間はゆっくり経過すると
アインシュタイン博士は相対性理論で述べた

だから
スポーツカー乗りは年を取らないのか
と強引に納得する

蒸し暑い真夏の夜
工場の僅かな灯りに照らされ浮かび上がる
愛車を眺めながら

私は
空想を巡らせた

『ある夏の半島出張』



『ある夏の半島出張』

燦々と照り付ける夏の太陽
彩りを添えるビーチパラソル

海水浴客で賑わう
日曜の昼下がり

長浜海水浴場を
横目に

私は
いつもの道を愛車で急いだ

途中
立ち寄ったコンビニでは

冷たいものを買って求める
子供は水着姿

帰宅で渋滞の車列を

見ると

同乗者は
皆居眠りしている

こんな午後の半島出張は
どうも力が出ない

休憩しようと
月浦に寄れば

アベックが
肩を寄せ合っていた

走りにくい時間帯に
懲り懲りした私は

溜息混じりに呟いた

早く
夜になればいいのにと

『夏祭りのあと』



『夏祭りのあと』

夏祭りが終わって
夜の商店街に
静寂が戻った

人混みが苦手な私は
仕事のふりをして
石巻から逃げたが

アーケードに残された
吹き流しや
万国旗を見たら

少しだけ後悔した
が
後の祭

この町で生まれ育った者にとって
年に一度の
川開き祭りは特別らしい

祭りの期間に帰省し
懐かしい友人と顔を会わすのが
楽しみなのだとか

そう言えば
昔

めかし込んだ幼なじみが
浴衣姿で現れて
色っぽく感じたことがあった

勇気を出して
彼女に告白しておけば
違う人生になったかも知れない

もう
何十年も前のこと

少しだけ後悔した
が
後の祭

『お盆の過ごし方』



『お盆の過ごし方』

ただいま

と

真っ暗な我が家に帰宅しても
誰も居ない

カップラーメンに
レトルトカレー

タッパーに詰め込まれた
おかずにカット野菜

子供を連れ盆帰省した
家内の
ささやかな気配りか

味気ない
独りの夕食を済ませ

地デジを
独り占めしても
何故かつまらない

早朝
クルマを飛ばして
実家に向かう

墓参りを終わると
急いでとんぼ返り
仕事に出向いた

サービス業には
地獄の釜の蓋も
ないのだ

『深緑恐竜に跨った旅人』



『深緑恐竜に跨った旅人』

道端に並んだ草花が
暑さでぐったりしている

涼を求めて訪れる者を失望させる
灼熱の松島に

メタルキャンバスの背をした
深緑恐竜に跨がり
旅人は現れた

日焼けした顔は笑みが溢れるも
彼の瞳はしっかりと
北を見つめている

どんな一生を送るかは
誰しものが自由であるべきだ

人生というキャンバスに
自分らしい色彩を

思うがままに描くがいい

しかし現実はどうだろう

家庭や組織や

しがらみに束縛され

もがく毎日

恐竜が鳴き声を発したかは

判らないが

我々も

声を出さずに悲鳴を上げたくなる様な

狂気の世の中だ

心の叫びが聞こえたら

一人旅に出ようじゃないか

彼の背中には

そんな雰囲気漂っていた

辺りが薄暗くなって

松島湾の色が変わる頃

深緑恐竜に跨った旅人は

再び北を目指し

旅立って行った

『家族とクーペ』



『家族とクーペ』

誰も居ない
夜のコイン洗車場

ツルリとした
クーペのボディに

外灯の明かりが反射し
ぼんやりと鈍く光ってる

毎日部活で疲れてるから
ボク行かない

アタシたちは
人と逢う約束があるの

洗い終えた愛車を
磨きながら

私は

家族の声を思い返した

ミニバン嫌いのわがまま男が
選んだクーペ

最後に4人で遠出したのは
いつだったか

10年も経つと
子供も大きくなり

4人で乗ることは
滅多に無くなった

仕方ないさ
フラれても気にするな

休日に
また家族を誘ってみろよ

エンジンをかけると
そう私を

クーペが
励ましている気がした

『お上りさん仙台へ』



『お上りさん仙台へ』

広瀬通りをすり抜け
渋滞から解放されると
東北本線の高架橋を潜った

すると
仙台市の
懐かしい地域に辿り着く

若い頃に汗を流した
会社の建物は
この辺りだったか

街灯と
ヘッドライトに照らされた
元寺小路は

暗闇の為なのか
何かが違う

よく見たら
ローカル線は
地下鉄に変わり

整備された真新しい道路に
これまた真新しいビル群が
建ち並んでいた

未来都市と変貌した駅裏は
かつての面影を
すっかり消し去って

何年か振りに足を踏み入れた
お上りさんを
嘲笑っているかの様だ

行ったり来たりしてみたが
目的の建物は
とうとう見当たらなかった



『秋の歌声』

夜

ようやく仕事を終えて
帰宅路へ

クルマから降りると
私の耳に
賑やかに聞こえてきたのは

虫たちが
秋の夜長に高らかに
鳴いている音だった

それは
まるで異常な気温の
夏が過ぎ去り

ようやく訪れた
過ごしやすい
東北の初秋を悦んで

歌っているかのようだ

猛暑を乗り越えた

虫たちは

逞しく元気なのに

私はというと

夏バテ気味で今一つ

元気が湧いて来ないのだ

『退屈しない旅』



『退屈しない旅』

陽が沈んでいく
秋の石巻港を
クルマの窓から眺めていた

その時
ふと思った

運命は
最初から決まっているか

違うと思う

使命や目的が備わっていて
その為この世に生を受けた

そうだろうか

人は誰でも
何故

何の為にと
己に問い掛ける

もし人生という旅に
予めスケジュールが決まっていたら
つまらないと思う

恐らく
運命も使命も
へったくれも無いのではないか

だとすれば
それは自分で見つけ
自身で決めるのではないだろうか

何をすれば
人や社会の役に立つのかを見極め
追い求める旅

それは勿論
上手くいかない事だらけの
危なっかしいスケジュールだが

きっと
退屈しない旅に違いない

いつの間にか
コックピットが真っ暗に変わったのも
気付かないまま

私は
物思いにふけていた

『お父さんの休日の過ごし方』



『お父さんの休日の過ごし方』

普段より

ゆっくり起きるのが
世間のお父さん

普段より

かなり早く起きるのが
私

出掛ける前に

クルマを磨くのが
世間のお父さん

早朝に一人

クルマで出掛けるのが
私

家族連れて遊びに行き

渋滞に遭うのが
世間のお父さん

渋滞を避け早めに帰宅して
クルマを磨くのが
私

帰宅して
一杯飲んでほろ酔い
夜は家族と過ごすのが
世間のお父さん

眠くて普段より早く就寝
夜も家族とすれ違い
自己陶醉なのが
私

『物心ついた頃』



『物心ついた頃』

例えば
道を横切る時

クルマの往来に
身の危険を感じ

注意して渡る様になったのは
何歳頃からだったか

例えば
友達と遊ぶ時

女の子には
照れや抵抗を感じ

男同士で行動する様になったのは
何歳頃からだったか

例えば

家族と過ごす時

親に対し口数が減って
部屋にこもったり

一緒に出掛けなくなったのは
何歳頃からだったか

あっという間に君は
逞しく成長して
僕の手を放れんとしている

君と楽しんだ
懐かしの公園に
今夜ふと立ち寄り

嬉しさと寂しさを
一人で
噛み締めてみた

『愛しのキャブレター』



『愛しのキャブレター』

鈍く光る
銀色の衣を纏った
君は

ツンとした横顔で
一見
クールを装っている

でも実は
グズったり
神経質になったり

変わりやすい
秋空みたいに
駄々っ子

いつも君は
ご機嫌斜めで
僕を振り回す

とっても気まぐれ屋さん
でも
そこが愛しい

今日のご機嫌は如何と
様子を伺い
そして

わがままに合わせたり
宥め宥め
気を使いながらも

僕はまた
君をデートに誘う

『苦楽病自動車』



『苦楽病自動車』

プスンと
呻き声を上げたっきり
エンジンが掛からなくなった

私は
平静を装い涼しい顔で
秋色の草花の並んだ道脇に
愛車を押した

クラシックなクルマが
ボンネットを開け立ち往生している姿は
よほど珍妙なのだろう

物珍しげにジロジロ見られるのは
慣れっこさ

これで十何回目だろう
トラブルも楽しみ的一部分と言ったら
笑われるだろうか

いつ壊れるか分からない様なものに
好んで乗る僕は
世間の人から見れば病気

苦楽病自動車と書いて
クラシックカー

そんな言葉遊びしているうちに
辺りはドンドン暗くなっていく
焦りながら故障と格闘した

『ハムスター症候群』



『ハムスター症候群』

素肌が切れる様な
ヒンヤリした北風が
吹く季節が到来すると

私は
毎年同じ事を思う

冷えた手で
愛車を磨きながら
タイヤホイールを見つめれば

ハムスターがくるくると
同じ処を回っているのと
大して変わらない一年だったと
振り返るのだ

時間に追われ
仕事に追われ

家と職場の往復を
ひたすらの繰り返し

これを
hamster症候群と呼ぶ

もう何年も
この病に掛かったままの
私

今年もまた
県外に一步も出ず
年を越してしまうのだろう

『クルマで就寝』



『クルマで就寝』

腕を伸ばして
パワーウィンドウのスイッチを探った

数センチの隙間から
車内に運ばれた三陸の風は
磯の薫りがする

それは
私の頬に当たって
ヒンヤリと心地良い

いつからか私は
出張は愛車で寝るのが
得意になっていた

早朝飛ばして向かうより
前夜から牡鹿半島に着き
クルマで就寝するのだ

うとうとうとうと
ぶるるるっ

腕を伸ばして
ヒーターのスイッチを探った

深夜に入り
外気温が下がってきたようだ
車内に運ばれた暖かい温風

それは
私の足元に当たって
ホカホカと心地良い

『バイク屋さんの説教』



『バイク屋さんの説教』

雨天乗った後は必ず手入れを
とくにチェーンには
油をまめに差して下さいよ

そうします
とバイク屋さんに
生返事の私

ここ来ると
いつも彼に
説教されるのだ

白い息が見え
首まで包むトレーナーを忍ばせる
季節になると
バイク通勤はキツくなる

トレーに滴るオイルを見つめながら
二輪は通勤手段だと

良い訳するが

どうせこんなボロバイクと
乗りっぱなしの私に
再びお節介

作業終了しました
250でキャブの4気筒ツインカムは
もう造ってないんですよ

もう貴重なんですよ
大事に乗って下さいよと
最後まで彼のお説教

数十分後には
情熱を持つ男に負けて
二輪の魅力を再認識させられた

そうだな
たまにはコイツも
磨いてやろうか

『最後の楽園イッズミー』



『最後の楽園イッズミー』

右も左も見渡す限り続く
紅葉のガーデン

食欲をそそる
芋煮の匂いに誘われ
泉ヶ岳のきつい坂を登れば

所狭しとひしめき並ぶ
赤青黄色とりどりの
20世紀のクルマ達と出会える

持ち主の愛情が注がれ
ピカピカに磨き上げられた
それらは

どれもが主役の如く
一台一台が個性的で
魅力に満ちている

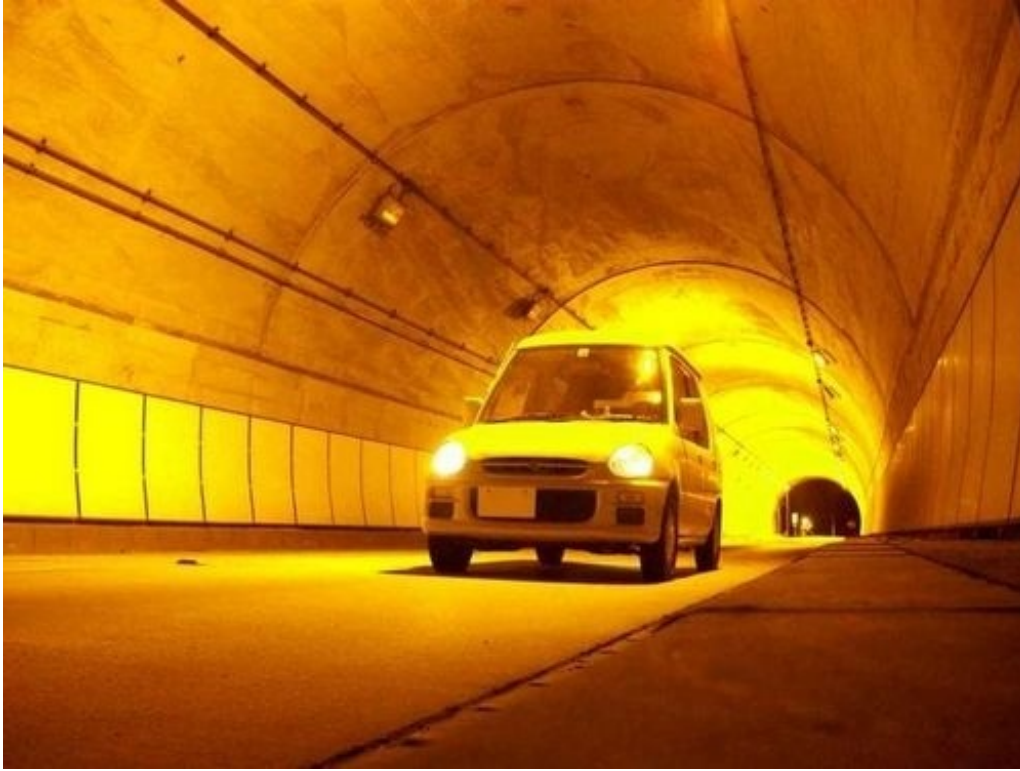
人一倍クルマ好きならば
最後の楽園イッツミーに
是非足を踏み入れるがいい

まるで
前時代に遡った様に
ゆったりと流れる和やかな空間

その居心地の良さに
何時までも浸って居たくなる筈だ

エコだハイブリッドだと
節エネルギーこそが美德と
詠い踊れされるご時世に

実用性より趣味性を重視する
そんな贅沢は
やや肩身が狭いが



『牡鹿半島の攻略法』

万石橋を通過すると
私は背もたれを
無意識に一つ高くした

ギアを一段落とし
9時15分の位置で
ステアリングを握り締めれば

アップダウンに加えて
左右合わせて143もある
牡鹿半島のキツイ連続コーナーに

思いっきり飛び込んでいく
準備が整った

だが
しかし待てよ
この9年で2台パーにしたのを
お前は忘れたのか

スピード出し過ぎによる
横転事故
それに接触事故

不意に飛び出す
鹿をかわして
何度ヒヤリとしたことか

そんな思いが頭によぎり
アクセルを踏み付ける気が失せた
私は

少しだけ
大人になったのかも知れない

あっ
後ろから追い抜かされた
までこの野郎

半島攻略の前に
ハンドルを握ると変貌する
性格を治さないと

命が幾つあっても
足りないかも知れない

『Car of fire』



『Car of fire』

いつ降ってくるか判らないから
スタッドレスタイヤに
早く交換してね

ああ

それから
ガス台とレンジフードの
油掃除もお願いね

ああ

窓ガラスも汚いのよ
拭いてね

ああ

年末になると
きまって

苛立ち気味になる家内

対照的に
ギリギリまで
腰を上げない私

しまった
支払いを忘れてた
まだあるぞ

お歳暮も
X'm a s プレゼントも
そうだ年賀状も買わなきゃ

尻に火が点いて
慌てて行動

年が越せるか
Car of fire
(火の車)

『フランソワーズ&光のページェント』



(画像提供：SENDAI光のページェント実行委員会)

『フランソワーズ&光のページェント』

その豆電球は
とても小さくて
華奢

先が見えない暗黒の闇を
ほんのり照らす
儂い光を

やっと放ってる

それは
定禅寺通りのケヤキ並木に
飾り付けられた
SENDAI光のページェント

一見すると
頼りない灯りが

私には
精一杯明るく振る舞っている様に
思えてならない

ちょっと
フランソワーズ嬢
に似ている

1つのともしびは弱くとも
手と手を合わせて
繋がれば

何十万個もの
イルミネーションの輝きと
なるではないか

その瞬きに力を借りて
明日を迎える勇気を
振り絞ろう

互いに
また一歩
前に踏み出そう

『サンタクロースがくれるもの』



『サンタクロースがくれるもの』

パパ

どうしてサンタクロースは
赤い服を着てるの

そりゃきっと

もし黒い服だと
泥棒と間違えられるからさ

パパ

女性のサンタクロースは
何故いないの

そりゃきっと

女の方は冷え性が多いので
冬は辛いからさ

パパ

サンタが担いでる大きな袋には
プレゼントが入ってるんだよね

そりゃきつと
大きな夢や希望を掴みなさい
という意味かも知れないよ

パパ
どうして靴下をぶら下げるの
プレゼント入るのかな

そりゃきつと
欲は程ほどにしなさい
という意味かも知れないよ

パパ
今夜サンタクロースは
僕にもプレゼントくれるのかな

そりゃきつと
世界中の全ての人々にサンタは
平等にチャンスを与えてくれるよ

ほんと？
ボクはサンタクロース信じるよ
メリークリスマス！

本当さ
きっと誰もがサンタを待ってるのさ
メリークリスマス！

『草むらのヒーロー』



『草むらのヒーロー』

人気のない暗がりに
亡霊の如く
ひっそりと佇んでいる

ボディは色が剥げ落ち
室内は土埃にまみれ
芯まで深く錆びつき
無念そう

誰が呼んだか
草むらのヒーロー

かつては愛され
ピカピカに磨かれ
生き生きと誇らしげに
駆けていたに違いない

それが今では
飽きられた玩具の様に

朽ち果てたスクラップ車

もしも
トイストーリーの様に
話せたら何を語るだろう

自然に返してくれ
あるいは
復活させろ

どちらだろうか

『お陽さまの光のもとに』



『お陽さまの光のもとに』

曇ったフロントガラスに映る
新春の
昼の景色は

燦々と注ぐ陽光で
建物も道路も
照り返し

今朝の雪は溶け
乾いた道端に
僅か残るだけ

外は暖かいのではと
錯覚するのは
ヒーターが効いているから

一歩でも車外に出れば
冷たい風に
尻込みするだろう

太平洋沿岸は明るくて羨ましい
こっちは毎日どんよりさ
北陸の人が言っていた

そうか
仙台の積雪が少ないのは
冬でもお陽さまが
顔を出す日が多いからか

何て恵まれた地域だろう
40年以上住んでいて
改めて気付いた

そんな事を考えながら
クルマを走らせた
お陽さまの光のもとに

『雪溶けの音』



『雪溶けの音』

ドサドサッと
落ちる音は
季節が動いた印である

脈動が重く伝わるのは
それだけ
長い冬だったから

ひと頃より
だいぶ
積雪は減って

かんじがらめで
暗かった
これまでとは違う

ところが
ひと度降ると
中々消えないのは

暫しの間は
風当たりが強く
まだまだ低温だから

癒えるのに
まだ少し
手こずっているだけ

ドサドサッと
落ちる音は
季節が動いた印である

溶けない雪はない
待ち遠しい春は
必ずやって来る

『リュックの少女』



『リュックの少女』

やーだ!
撮らないでー

そう言って君は
照れ笑いで
ファインダーから逃げた

お気に入りのリュック
背負った君は
何とも愛おしい

もしもしー?
あのねー

中には
玩具の携帯やお菓子
一杯詰まってる

また追い掛けると

観念した君は
満面の笑顔でピースサイン

どうして気に入ったの
訪ねる私

だって一、
もしジシン来ても
このリュックなら
大丈夫でしょー？

柔らかい太陽が
そっと微笑む
夏の昼下がりにあった

これまた、お約束の...



曲目：「無限非行(夢幻飛行)」

♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～

夜間非行の...

クルマのお尻に点滅するランプは...

遠ざかるにつれて次第に...

ネオン街の瞬きと区別がつかなくなります...

お読みいただいておりますこの詩が...

苦笑いながらあなたの心にとけこんでいきますように...

♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～